

磯江毅展 開催記念展示

驚くべき技と美

本展は、圧倒的な細密描写で知られる磯江毅を取り上げた特別展「スペイン・リアリズム絵画の異才 磯江毅」展（～5月24日）に関連して、広島ゆかりの作家に注目し、3つのテーマに分けて開催します。それぞれの作家の高い技量と絶妙な表現。ジャンルを超えた、幅広い視点から、それぞれの巧みな表現をご堪能ください。

彫刻展示スペース

彫りと塗りに見る、ハイパーテクニク

《落葉》は、奈良の東大寺戒壇院の僧侶が二月堂での勤めを終え、落葉を踏みしめて帰る姿に想を得て、制作されました。陰影に富む顔の造形、風を受けた僧衣の描写には、木の特性を活かした作者の卓越した彫技が見て取れます。平櫛田中は、岡山の田中家に生まれ、後に福山市の平櫛田家の養子となりました。明治40(1907)年、岡倉天心の指導の下に、高村光雲門下の米原雲海、山崎朝雲らと日本彫刻会を結成。昭和33(1958)年六代目尾上菊五郎をモデルに、20年の歳月をかけて完成させた大作「鏡獅子」がよく知られます。昭和37(1962)年文化勲章受章。彫刻界の重鎮として、晩年まで旺盛な活動を続けるとともに、木彫の活性化に尽力しました。

金工で刀の冴えを見せるのは、三原市に生まれた清水南山です。東京美術学校で加納夏雄などに学び、奈良各地で古美術研究にも取り組みました。後に同校教授、帝国芸術院会員となり、後進の育成にも尽力しました。鋭い片切り彫りを得意とし、その繊細な表現と力強さは、近代日本を代表する金工家のひとりとして高く評価されています。

漆工分野からは、師弟関係にある梶山明細と植松抱民をご紹介します。明細は、13歳の頃から漆技の修業を始め、当初は江戸幕府の元で制作。明治期以降は熟練の技を発揮し、国内外の博覧会への出品を重ねました。抱民は、15歳の時から十年にわたって梶山明細に師事しました。最高水準の技術と、明治期の新しい時代の息吹をこめた意匠を兼ね備え、江戸時代に隆盛した研出蒔絵の最後の名工として知られています。

当館主任学芸員
石川哲子



平櫛田中 《落葉》 1913 (大正2)年

第1室

それぞれの技と美

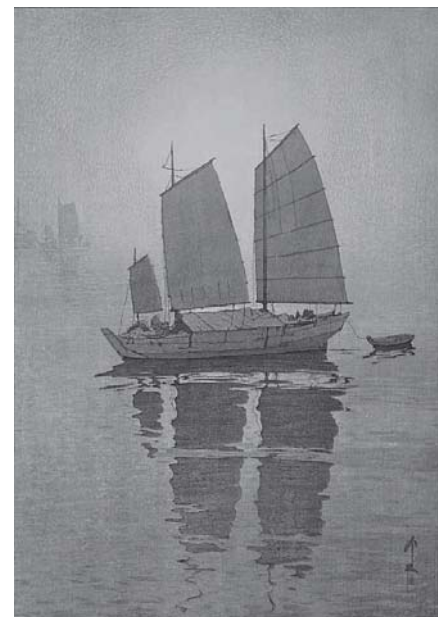
磯江毅の作品は、3次元空間を、絵画という2次元に封じ込めたような、人が描いたとは思えない高い密度を持っています。

しかし、作品を作る方向性や手法は、時代や地域、そして何より、作家の求めるスタイルによって大きく異なります。

ここでは、そうした個々の作家ならではの創意工夫と、それを実現する高い技術が見て取れる作品を集めてみました。

たとえば一つの版を使って刻々と変化する海の情景を描き出した吉田博の《帆船》シリーズ。あるいは、おつゆ描きした画面が生乾きの間におつゆの層を掻き落として描くことで、今までにない表現を展開した角浩の《ジブシーとドンキホーテ》。彫刻家としての経験から作品の力強さを求め、黒い色から塗り始める水船六洲の作品は版画とは思えない分厚い絵の具が特徴で、凹凸のある画面が表情豊かに語りかけます。

同じ版画でも、シャープな線の集合で、澄んだ空気さえ感じられるさわやかな情景を描き出す細田政義。本来なら手のひらくらいの小さな作品しか刷れないはずの木口木版の技法で油絵にも負けない巨大な画面に物語を描く小林敬生。それぞれの作家が究めた、それぞれの「技と美」をお楽しみください。



当館主任学芸員
角田 新

吉田博 《瀬戸内海集「帆船朝」》
1926 (大正15)年

第2室

日本画の技—児玉希望の画業を中心に—

ここでは、現在の広島県安芸高田市出身になる画家・児玉希望の画業を中心に、卓抜した技術に裏付けられた日本画とその関連作品を紹介します。

児玉希望は、大正7年(1918)の上京後、川合玉堂の画塾に入門しました。早くも大正10(1921)年《夏の山》で第3回帝展に初入選、昭和3(1928)年《盛秋》、昭和5(1930)年《暮春》[本展出品作]では第9回、第11回帝展で特選を受賞するまでになります。師ゆずりの自然観察眼に加えて確かな線描技術と豊かな色彩感覚を備えた希望ですが、創作意欲は留まるところを知りません。西洋絵画を意識した色彩表現や水墨と金泥による作風の試みなどに取り組む一方、約1年間にわたるヨーロッパ写生旅行も断行します。この旅行を経た希望は、日本画における西洋絵画に対する優位性は水墨画にこそあると確信し、従来の日本画にあまり例を見ない水墨による抽象表現的傾向の作風にも積極的に取り組んでいきます。およそ一人の画家による展開とは思われないほど多彩な画業ですが、その根底を支えるのは師の画塾に入門して以来日々培ってきた日本画の技術であったと思われるのです。

希望はもちろん、師の川合玉堂、玉堂の師にあたる望月玉泉と橋本雅邦、広島における次世代の画家として日本画壇を牽引した奥田元宋や平山郁夫にも、どうぞご注目ください。

当館学芸員

隅川 明宏



児玉希望《暮春》1930(昭和5)年